

<目的> 昨年実施した、小学生を対象とする人間関係の調査で、家族や友達との関わりが、貧弱・縮小化している実態が明らかにされた。そこで、本報告では、就学前児に着目して、人間関係が発達・変化していく過程を明らかにする。

<方法> 香川県M市立J幼稚園（男児70名、女児90名、計160名）の全園児を対象として、1990年11月下旬にアンケート調査を実施した。調査項目は、前日における主な行動の時間、場所、内容、人についてであり、調査票は、園児に持ち帰らせて父母に記入してもらった。

<結果> 家族全員で食事をしたのは、朝食で2割、夕食で5割、朝夕共は2割に満たないが、これは小学生の調査と一致していた。性別、年齢別による差異はみられない。その他の生活行動では、母親と一緒に行動が、ほぼ全員にみられ（「母親と」では3歳児100%、4歳児98.2%、5歳児96.6%）、きょうだいとの関わりも多い（「きょうだいと」では3歳児93.0%、4歳児93.8%、5歳児92.6%）。父親、祖父母とはやや減少するが（「父親と」では約7割、「祖父母と」では約8割）、小学生と比較すると多い。戸外遊びは年長になるほど多く、3歳児では男児が多いが（男児54.2%、女児21.7%）、5歳児になると共に活発になる（男児70.4%、女児74.2%）。戸内遊びでは、年齢、性別に関わらず、8割以上が行なっている。小学生に比較して、戸外、戸内共に多い。遊び相手では、戸外、戸内遊びとも、父母やきょうだいを含む場合が多く、特に、きょうだいを中心とする遊びの広がりが大切であることがわかる。